

# 防犯の強化(1)

- 「犯罪認知件数は、震災のあった1995年には前年に比べ15%減ったが、1997年には震災前の水準に戻った」(2005年1月14日・神戸新聞)
- 「窃盗事件」と「悪質商法」
- 窃盗事件
  - 空き巣(避難等で留守の家)
  - 車上狙い(自宅駐車場や路上駐車中の車)
  - 置引き(避難所や復旧現場等)
- 悪質商法
  - レンタル簡易トイレの執拗な勧誘
  - 家屋・屋根の簡単な修繕による高額請求
  - 一方的な見積もりによる仮設住宅の売込み勧誘



防犯協力の家(通学路を中心に設置)(北海道札幌市澄川地区)

## 防犯の強化(2)

1. お金や貴重品は必ず身につける(銀行の貸金庫も便利)
2. 家・車には必ず鍵をかけ空き家・長期の放置車両であることを見破られない
3. 知らない人からの電話には安易に答えない(個人情報などを漏らさない)
4. 契約はひとりではしない(点検・修理を装う悪徳業者に気をつける)
5. 被害に遭ったら必ず警察に届ける(カードや証書等が別の犯罪に使われるのを防止する)

新潟県中越地震時の新潟県警ホームページより

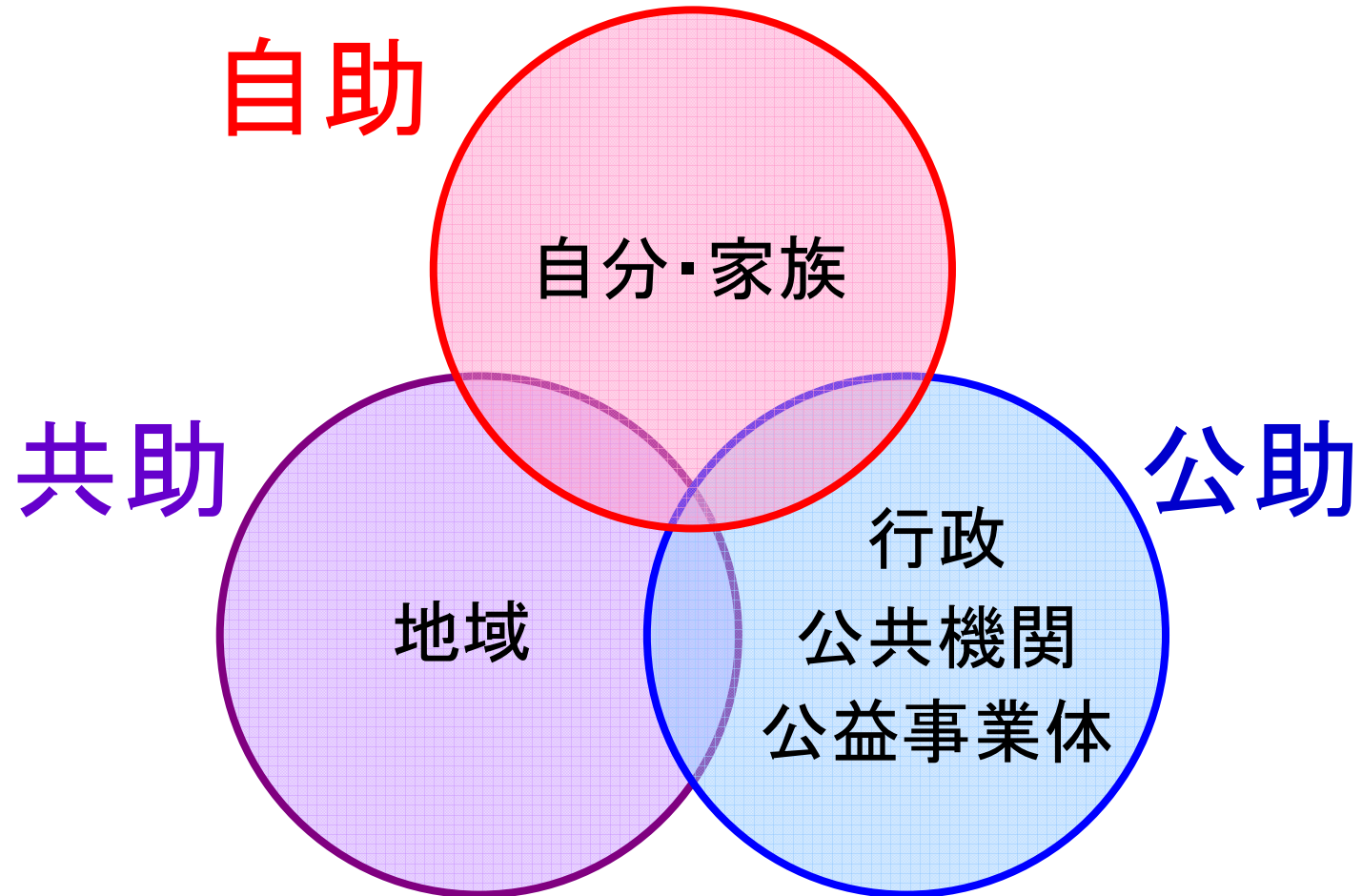


歳末特別警戒 (24日から1週間)  
青色パトカー2台と徒歩で、中核は警察幹部OB(北海道札幌市澄川地区)

# 本日の内容

- 1 災害からいのちを守るための基礎知識  
(水害からの避難と関連死)
- 2 中山間地域の災害対応課題  
(ライフラインの途絶がもたらす影響)
- 3 中山間地域での危機管理  
(自助・共助・公助のバランスによる地域強化)

# 防災の担い手は誰か？



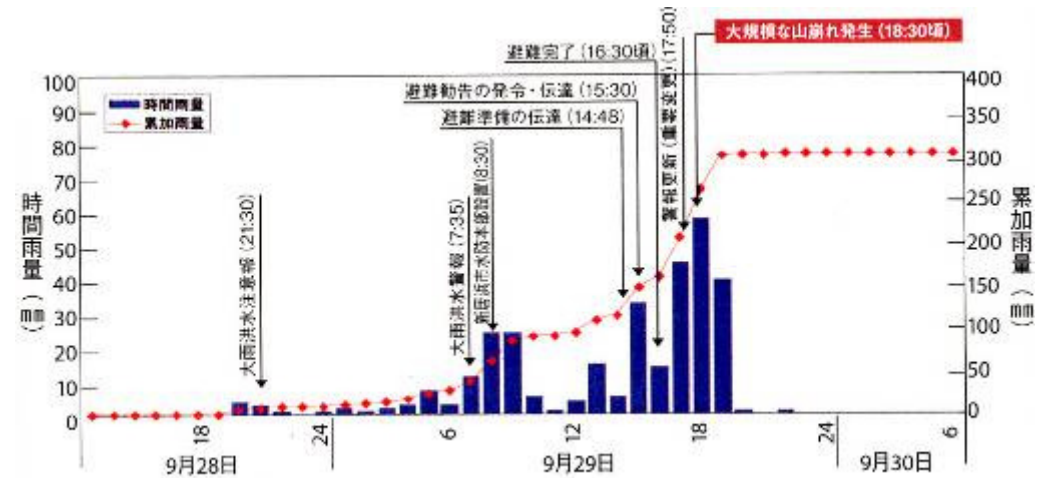
# 自主防災組織が機能することで避難

- 立川地区は、明治32年、昭和51年、平成11年に土砂災害を経験
- 自主防災組織では、自治会と連携して連絡体制・警戒避難対策のマニュアル化、避難訓練を実施。民生委員と連携して高齢者の早期避難体制の確立
- 平成16年台風21号(9月29日)、避難勧告発令までに、既に自主防災組織による避難準備を呼びかけ、避難誘導や搬送の役割分担により避難終了。全半壊5棟にもかかわらず人的被害なし

たつかわ  
愛媛県新居浜市立川地区



避難後に発生した山腹崩壊と土石流



平成16年台風21号(9月28日~30日)の連続雨量と累加雨量(気象庁新居浜観測所)

14:48 積算雨量200mm。自治会長と防災担当が気象庁の雨量予測をもとに避難協議(携帯電話)。役員、会員が避難準備伝達。消防署員・団員が自治会館集合。

# 自治会長等の判断により避難

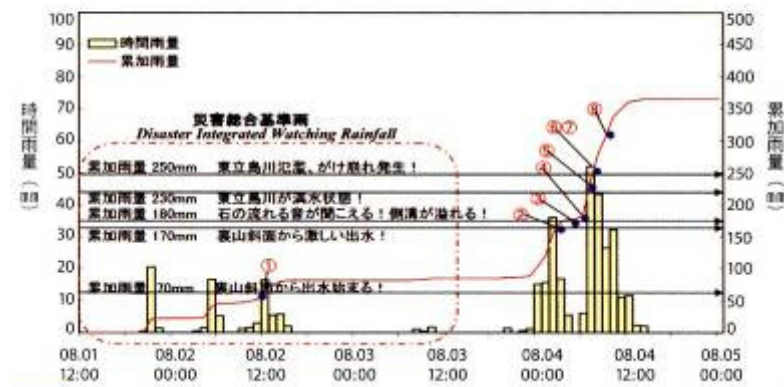
- 東立島地区は、丘陵の北東側の海岸沿い、中央に東立島川
- 地域内に土砂災害危険箇所あり

ひがしたつしま  
新潟県佐渡市東立島地区



8月4日	
3:00	いつものようにラジオを聞きながら寝ていたので、大雨になることはあらかじめ知っていた
~3:30	夜中目が覚め、3時~3時半頃、様子を見ようと外へ出る。前々から溢れることの多かった自宅脇の水路の状況を見に行くと、案の定溢れていた。そのため、自家用車を安全な場所に移動した 明るくなる頃、前々から危険地域であることは知っていたので、近所の人とそのような話題で会話していた
5:00	夜が明ける頃、増水による危険を感じ、市役所に第一報を入れた
6:00~7:00	増水は進み、6時から7時頃、住民は自衛の水防活動として、溢れ出す側溝の蓋を取り外すなど活動を行った 7時頃には、川が土砂とともに激しく増水し、床下浸水は必死と判断されたため、家屋から離れるように指示するとともに、非常事態を市役所に通報した。このとき時計を見たら7:30頃だった
	裏斜面から「ブチブチ」と太いものが切れるような音がしたかと思うと竹林が動き出した。竹林は表面が浮き上がったように動き、斜面全体が一体となって滑り落ちるように崩壊した これを見て、 <b>周囲の住民に聞こえるような大きな声で「逃げる!」と叫び、すぐに市に連絡した</b>
7:30	直後、東立島川河口で水が吹き上げるところを目撃した(河口にある岩に流出した土砂や水が激突して吹き上げたものと想像した)  隣接する集落の区長へ、避難受け入れの依頼を電話連絡し、東立島川より西側の住民は鮎(あわび)の公民館へ、東側の住民は東強清水(ひがしこわしみず)の中川縫製工場へ避難することになった
8:00	8時頃、増水のため東立島地区の西側で立ち往生していた新潟交通の路線バスを利用し、鮎(あわび)地区公民館への避難者輸送を行った。8時半頃には完了していた(区長は東立島川の西側にいたため東側の状況は詳しくない)
8:30	全員無事を確認した

年月日	番号	時刻	累加雨量mm	発現現象内容
8月2日	①	12:00頃	69	区長氏近くの裏山斜面から出水が始まる
	②	3:00頃	172	区長宅近くの裏山斜面から激しい出水が確認される
8月4日	③	5:00頃	178	側溝などが溢れる 東立島では石の流れる音が聞こえる 区長が増水による危険を感じて市役所へ連絡
	④	6:00頃	184	側溝の蓋を取り外し、水防活動を行う
	⑤	7:00頃	236	東立島川が満水となり浸水被害は必死の状況
	⑥	7:30頃	258	斜面が崩壊し、家屋2棟全壊 東立島川が溢れる
	⑦	7:30頃~	258	区長が市役所に連絡後、自主的に避難開始
	⑧	9:00頃	306	東立島川の住宅で床下浸水



# 地域独特の災害伝承で守る

- 平成9年7月7日から降り始めた梅雨前線豪雨で、12日未明に布施川上流域で大規模な崩壊、流木を伴う土石流として流下。全壊3棟
- 5:30地元自治会長が川を石が流れる音に目覚め、川を見て流水の異常に気づき、周辺4世帯に避難呼びかけ。6:00土石流発生。6:30災害対策本部設置(旧平田市)、8:30布施上地区に避難勧告発令
- 年長者より「自分の身は自分で守る」「川の石が音を立てて流れるときは気をつけろ」と伝承

おく う がちょう ふ せ かみ  
島根県出雲市奥宇賀町布勢上地区



被災状況

月日	時刻	事項
7月12日	5:30頃	自治会長が川を石が流れる音に目覚め、川を見に出て流水の異常に気づき、周辺の4世帯に避難を呼びかける。これにより4世帯17人が自主避難(一次避難)
	6:00頃	土石流発生
	6:30	災害対策本部設置(平田市)
	8:30	布勢川上地区に避難勧告が命令され、一次避難者も含め28世帯127人が避難(二次避難)

# 地域力 避難所で生きた



**新潟中越地震・小千谷**

新潟中越地震発生から約1週間、避難生活を送る被災者たち。避難所では、地域力によって生活が支えられている。避難所では、地域力によって生活が支えられている。避難所では、地域力によって生活が支えられている。

## 食料・医療…翌日班立ち上げ

避難所では、食料や医療の確保が最優先課題。翌日班が立ち上がり、物資の調達や医療支援に取り組んでいる。避難所では、食料や医療の確保が最優先課題。翌日班が立ち上がり、物資の調達や医療支援に取り組んでいる。

## 水や電気自力調達

避難所では、水や電気の確保が課題。自力調達の方法が模索されている。避難所では、水や電気の確保が課題。自力調達の方法が模索されている。



## 冬ソナ名場面にうっとり 各務原で開幕

冬ソナ名場面展が各務原市で開幕。被災者たちは、名場面を見て涙を流す。冬ソナ名場面展が各務原市で開幕。被災者たちは、名場面を見て涙を流す。

避難所生活の苦しみや悲しみ、涙を流す被災者たちの姿が、冬ソナ名場面展を通じて伝わっている。避難所生活の苦しみや悲しみ、涙を流す被災者たちの姿が、冬ソナ名場面展を通じて伝わっている。



# 災害時 期待される商店街



夜間訓練で400人分の豚汁を作る。價れない大型の調理器も、毎年使っているといざというときにすぐに使うことができる(東京都墨田区で、「カット倶楽部」提供)

## 店は「備蓄倉庫」／地域事情に精通

二十三日に発生した新潟県中越地域の被災地では、水や食料など生活必需品が大幅に不足している。地震をはじめ大災害に備えるために、地域の商店街の役割が改めて見直されている。商店街には様々な生活物資がそろっており、外部からの支援が到着するまでの間、地域住民同士で助け合えるからだ。

東京都墨田区の「墨田通り」では、通りの商店と地域住民が「カット倶楽部」を結成し、毎年九月に夜間防災避難体験訓練を実施している。地元の公園に午後六時に集合し、救助テントを設営。四百人分の炊き出しや応急手当の訓練など、翌朝解散するまで本番さながら、発電機や投光器、

がそろった。備蓄倉庫だ。東京都大田区の「大森銀座商店街振興組合」は今回の地震を受け、避難所への商品の供出、一人暮らし高齢者の安否確認など、地元で災害が起きた場合の具体的な支援策の話し合いを始めている。「店」として、供出できる商品や量を決めておくなど、災害時、地元住民のためにスムーズに動く体制を整えておきたい」と事務局は話している。

三年前、脳腫瘍が見つかり手術を受けた。手術後は半身不随の重い日常生活、言語障害になった。「良かっ」「良かっ」に「良かっ」妻の心に思いをたね、良かっ。手を手合わせた。ちらほら出てきた妻の白髪や、首の回りのシワを隠るにつけ、黄ぞクジンを引かせてしまった。申し訳なきで胸が痛む。

街の約百三十店舗の約六割が飲食店だ。非常時には生鮮食品などを積極的に地域住民に役立てることを、組合内で申し合わせている。五年前には組合費でポンプとホースを購入し、防火水槽のすぐそばに設置した。商店街の利点は、日中に商店主をはじめとする男手があること。日ごろから町の中で安全・防災の意識を高めておく必要があります」と同組合理事の田中立夫さん(66)。

「全国商店街震災対策連絡協議会」では、正朔から、「震災開きバケージ」を売り出している。東京の「早稲田商店会」が発案した一種の共済事業だ。年間5000円(小学生以下は3000円)の税別を支払って、地震で地域に大きな被害が出たとき、他地域にある宿泊施設などが「疎開先」として一定期間受け入れるという。

「変わる商店街」(岩波新書)の著者で、兵庫県立大学教授(地域活性化論)の中沢孝夫さんは、商店街はあらゆる生活物資がそろっており、店主たちは地域の事情にも詳しい。地震買収という観点から災害直後、被災者を助ける役割は小さくないと指摘している。

二十代後半のサラリーマン。結婚して五年、夫婦共働きで子どもはおりません。妻の生活の仕方やもの考え方をまっとうく受け入れることができません。起床時間、休日の過ごし方、浴室や寝室の

生活

読売新聞

2004年10月26日 朝刊 21面

# 行方不明者ゼロ「高齢者マップ」威力 能登地震の輪島・門前町

## 4時間後には全員の所在を確認

能登半島地震で震度6強を記録した石川県輪島市門前町は全壊44棟、半壊96棟と最大の被害に見舞われたが、倒壊家屋による死者はなく、行方不明者もゼロだった。高齢化率約47%の町が地震発生から数時間ですべての高齢者の状況を把握し、重傷4人、軽傷11人と人的被害を最小限に食い止められた理由は、町独自の「高齢者マップ」の存在にあった。本格的な高齢化社会への突入を控え、災害対策の大きなヒントになりそうだ。

門前町がマップを作製した契機は、平成7年の阪神大震災で相次いだ高齢者の孤独死だった。石川県は同年、全市町村に各地区ごとの「高齢者等要援護者マップ」の作製を通達。県の要請は「1人暮らし」「夫婦のみ」など家族構成を○や△などの記号で分けるといったものだったが、当時、旧門前町(合併後、輪島市)健康福祉課長だった佐藤千賀子さん(59)が「一目でわかるように」と地図上の各戸を生活状況に応じて色分けすることにした。

「寝たきりの高齢者」「1人暮らしの高齢者」「高齢者夫婦」などをそれぞれピンク、黄、緑で塗り分けている。

町は約7800人のうち65歳以上の高齢者が約3700人で、高齢化率は約47%。全国平均を大きく上回る。このため、町内の民生委員が毎年末に調査、更新してマップの精度を上げている。町と民生委員が同じマップを保有することで連携も取りやすい。

25日午前の地震発生直後、輪島市役所門前支所が町内全8地区の民生委員らに災害時対応の優先電話で高齢者らの所在確認を依頼。民生委員らはこのマップを活用して町内の高齢者宅を戸別訪問し、体調や家の損壊程度を確認しながら公民館などの避難所に誘導した。支所にも次々と情報があがり、発生から約4時間20分後の午後2時には高齢者全員の状況が把握できた。

実際にマップを手に高齢者の確認をした道下(とうげ)地区の民生委員、徳山忠志さん(65)は「頭の中でも近隣の高齢者を把握しているつもりだが、マップがあると、今回のような緊急時でも照らし合わせながら確実に確認できる安心感があつた」と話す。徳山さんは地区内の約40戸の高齢者宅すべてを約1時間で確認した。

実際の活用について、佐藤さんは「これまでも毎年、台風などがくるたびに何度も実験していたため、今回の『本番』でも素早い対応が可能になったのではないかと分析する。

県の通達が出た7年当時は他の市町村も高齢者マップを作製したが、最近の個人情報保護の流れでいつの間にか廃止されたという。旧門前町では過去に高齢者の孤独死が3件相次いだため、独自で続けていたマップ作りが今回の地震で威力を発揮、被害を食い止めた。

共助は地域組織力！

そのためには組織を牽引する**リーダー**が必要！



新潟県中越地震・山古志村村長

「2,168名の村民の内、5名が避難の説得に応ぜず  
残留する。その他には、行方不明者はいません！」

# 自分の地域に救援は来るのか？

- 国や自治体の注目度・優先度が高い
  - 人口が多い
  - 被災者が多い(=声の総量大きい)
  - 重要な施設がある(原発など)
- マスコミが取材しやすい
  - 情報が入りやすい
  - 交通の便がよい



- 人口の少ない中山間地域には「当面の救援は来ない」
- 当面(1週間程度)を乗りきるための「自助努力」と「共助で乗りきる仕組みづくり」が必要

# どのようにして備えを続けていくか

## 北海道札幌市澄川地区の取り組み

- ・日常の「防犯」と非日常の「防災」
- ・継続的な活動の仕組み(町内会、警察・消防・自衛隊OB、地域行事)
- ・子どもたちを巻き込む(学校)



歳末特別警戒 (24日から1週間)  
青色パトカー2台と徒歩で、中核は警察幹部OB

倒壊家屋からのダミー救出実験  
平成10年第1回総合防災訓練  
機材整備の必要性を共有する



女性消防隊 かつこいいでしょう



中学生消防隊 もっとかつこいいぞー



防犯の旗を掲げた防犯協力の家  
通学路を重点に地区内180軒  
犯罪抑止力に効果

中学生も救急救命訓練  
この真剣さ



よさこい会場運営本部  
交通安全・誘導・受付・会場警備・救護・給水  
など全てが避難所訓練に繋がる



# 「安全・安心の管理力」

災害・犯罪という非日常をいかに乗り越えるか

→「その場しのぎ」では対応できない

「普段やっていることさえ、なかなかうまくできない。ましてや、普段やっていない・考えていないことなど、できるわけがない」

→これまでの知恵・教訓を謙虚に学び、自分たちの弱み、地域で起こりうる問題を  
知ることで、対応力・応用力を蓄えておく

「あわてない」